

# FIELD NOTE

no. 89 Jul.

＼ 発見！ うら山の魅力 ／

## うら 博物館

あしもとを見て歩く  
鳥を探すうら山歩き

ムシの暮らしをのぞいてみると  
多彩なクモの巣

アートで届ける山野草の魅力

うら山を歩く楽しみ

うら山の鳥事情

夏鳥と希少種

フィールド暦

覗いてみよう 夜のうら山  
—センサーカメラが写した動物たち—

# FIELD・NOTE

no.89 Jul. CONTENTS

この写真と表紙の写真、じつはどちらも同じハナイカダという植物を写したものです。表紙の写真は、1枚摘んだ葉を空にかざし、裏側を撮影しています。いっぽうこの写真は、薄暗い森で光が差し込んだ瞬間に、葉の表側から撮影したものです。同じ植物でも見方を変えるだけでまったくちがうものに見えてきませんか。

表紙写真：伊藤瑠依  
ギャラリー写真：北垣憲仁

特集  
06

## ＼ 発見！ うら山の魅力 ／ うら山博物館

- 10 あしもとを見て歩く
- 12 鳥を探すうら山歩き
- 14 ムシの暮らしをのぞいてみると
- 16 多彩なクモの巣
- 18 アートで届ける山野草の魅力
- 20 うら山を歩く楽しみ
- 22 うら山の鳥事情  
夏鳥と希少種
- 24 フィールド暦
- 26 覗いてみよう 夜のうら山  
—センサーカメラが写した動物たち—

- 29 畑と、ていさん
- 32 思いがつなぐ<sup>ハート</sup>のシバザクラ畑
- 34 竹細工を作るひと、もらうひと
- 36 じょいつる市場  
—みんなでつくり上げる楽しさ—
- 38 教えてください！ 遊びの思い出 最終回  
話し上手は自分の身近に
- 42 つるのひとこま
- 43 連載 研究者が語るこのまちの魅力 第3回  
富士山から湧水が届くまち 3
- 44 ムササビ観察日記
- 45 FIELD・NOTE NEWS

## 都留フィールド・ミュージアムが目指すもの

下の写真は、森でアカネズミを観察しているようすを撮影したものです。アカネズミはふだん石の隙間などで食事をします。安心して食事ができる狭い空間をガラスの水槽でつくと、アカネズミの生きいきとした行動が直接観察できるのです。アカネズミだけでなく、身近な自然や地域の文化もできるだけ現場に出かけて観察し、記録し、地域の共有の財産として遺していく。それが都留フィールド・ミュージアムのテーマです。



### 山梨県都留市

面積：161.63km<sup>2</sup>

総人口：31,246人(2016年5月1日現在)

足元の水路には富士山の湧水が流れ、身近な森ではムササビとの出会いを楽しめます。山梨県都留市は、自然と人の暮らしを近くに感じることができる地域です。

# ツルフィールド・ミュージアム

### 都留フィールド・ミュージアムのフィールドとは？

私たちのフィールドは、特定の地域に固定はしませんが、とくに都留を拠点として富士山とその山麓、桂川（相模川）流域に注目して活動していきます。

### 名称について

大学だけの取り組みではなく、広く市民と共有し、地域に開かれた交流を育みたいという思いから、「都留フィールド・ミュージアム」という表記を用いています。本学の地域交流研究センターが、この活動を担っています。





発見！うら山の魅力 /  
**うら山博物館**

うら山に入ると、頭の上を木の枝が覆いました。  
まるで木のトンネルのなかを歩いているようです。  
さて今日はどんな出会いがあるのでしょうか。



歩いていくと、フジの木のツタが見えてきました。  
これはブランコにできそうです。  
駆け寄って、よじ登って、足をゆらゆら、ぶらぶら。  
ツタに体をあずけて上を見ると、  
木のトンネルがさっきよりも近くに見えました。



ここはいつも暮しているまちのようすとは  
まったくちがうし、不思議なものがたくさんあります。  
だから楽しくて、好きになって、  
何度も何度も通うようになりました。

すると私たちは、山のおもしろさに気づき始めます。  
鳥はこんなふうに飛ぶんだ。  
葉っぱは落ちるとこんな色になるんだ。  
いろんな発見ができるこの場所は、  
まるで屋根のない博物館です。



だから私たちは、ここを「うら山博物館」と名づけました。  
「こんなすてきな博物館であるうら山を、  
いつかはみなさんと一緒に歩いてみたい」  
そんな思いを胸に、うら山の魅力を紹介します。



# FIELD MAP

うら山探検編



05 生きものを観察するための小屋



06 分かれ道。左側の道は楽山公園行き



07 この鉄塔付近に分かれ道があります



08 木が伐られて視界がひらけています



09 この出入り口は草が茂っています



03 光が差し込みきれいな林内



04 鉄塔を目指して登っていきます



02 うら山の出入り口



01 砂防ダム建設工事でひらけています



10 看板で曲がるとやまびこ競技場方面



12 この沢は深い谷になっています



13 山神大権現の鳥居が目印



14 やまびこ競技場の近くから山へ

うぐいすホール

楽山球場

楽山公園

都留文科大学

11 楽山球場付近の出入り口

やまびこ競技場

## うら山プロフィール

正式名称：尾崎山

標高：967.8メートル

位置：本学の南側。キャンパスから徒歩5分ほど

黄土色の線：うら山を歩くときに通る山道





マルバスミレ

右) 白い花びらがすてきで一番好きな春の花だ  
左) 上から見ると葉のようすが見やすい



うら山のあしもとを彩る草花は、枯れたり食べられたりしなければどこかへいつてしまうことはない。だから好きなだけ触ったり覗きこんだりして観察することができ。そうやって何度も見たものには愛着が湧いていく。うら山へかよっていくにつれて、あしもとに好きなものが増えていくのだ。

\* \* \*

この2種類をはじめて見くらべたとき、とても興奮した。同じスミレという名前がついているのに、葉の形は全然ちがうからだ。ひとことにスミレの仲間と言っても、花の色がちがったり、葉の形がちがったりと、種類ごとに個性があつた。それまで私は植物というと、緑の葉があつて花が咲くものくらいに考えていた。けれど細かい部分まで見ることで、種類ごとの個性を知れて、そのぶん植物に近づいた気持ちになった。うら山にはもつとたくさんの植物が生えているし、きつとその種類の数だけちがいがあつた。そう思うと、今まで以上にあしもとを見たくなってきた。

## あしもとを見て歩く

うら山を歩くとき、私はあしもとを見ていることが多い。あしもとに咲く花や草が好きで、いつのまにか目を向けている。

南條新(初等教育学科3年) = 文・写真

うら山の地面にはさまざまな植物が生えている。私がふだんとおる山道は踏み固められているため、あまり植物は生えていない。踏み入られることの少ない、道の両脇には草花が並んでいる。

春は花が目がいく。緑色の葉が茂る地面から、花びらの色が浮いて見えるからだ。花はうら山に入つてすぐの、日当たりの良い斜面にたくさん生えていた。そのあたりは、林というより草むらだ。私にとってその場所で花を見ることが、春のうら山での一番の楽しみだ。見られた花はタンポポやハルジオン、ヒトリシズカやスミレの仲間など。黄色や白色、薄紫色の花びらを見ると、春がやってきたのだとしみじみ思う。

しゃがんで花を覗きこむ。すると、いつもはあしもとにちよこんと咲いている花の、細かいところが見えてくる。種類ごとのちがいはまではつきりと見えるのだ。たとえば、うら山の斜面にたくさん咲いていたタチツボスミレ。この植物の葉はハートのような形で先がとがっている。いっぽう近くに咲いていたマルバスミレの葉は、名前のとおり縁が丸い。



スミレの次に好きな花

左) によきと生えるフデリンドウ  
右) ヒトリシズカ。花がブラシの毛のよう



タチツボスミレ

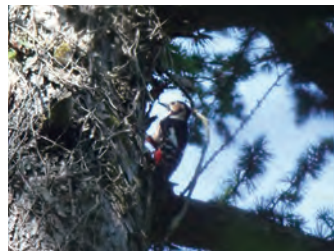
左) 細長い茎が花びらを重たそうにぶら下げている 中央) 1カ所に集まって咲いていた 右) ハート型の葉が互いちがいに生えている



1 ウグイス  
春に鳴き声はよく聞えるが、姿を見ることは少ない (2016.4.20)



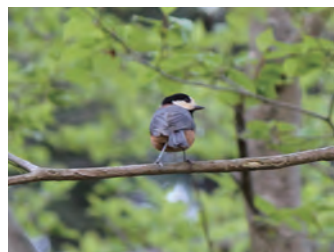
4 コゲラ  
ギィーと短く鳴きながら木と木を行き来していた (2015.4.25)



5 アカゲラ  
ギァーと大きな声で鳴きながら木から木へ飛んでいた (2016.5.12)



6 ゴジュウカラ  
写真のように木の幹を走る姿が印象に残る (2015.12.17)



7 ヤマガラ  
うら山のなかのどこにいても声を聞くことが多い (2015.4.23)



8 コガラ  
シジュウカラやエナガと同じような低木の林で見かける (2015.3.28)



10 シジュウカラ  
山のなかの明るいところで鳴いていた (2014.5.11)



11 エナガ  
枝にぶら下がるように止まる姿が、曲芸師のような鳥 (2014.12.18)

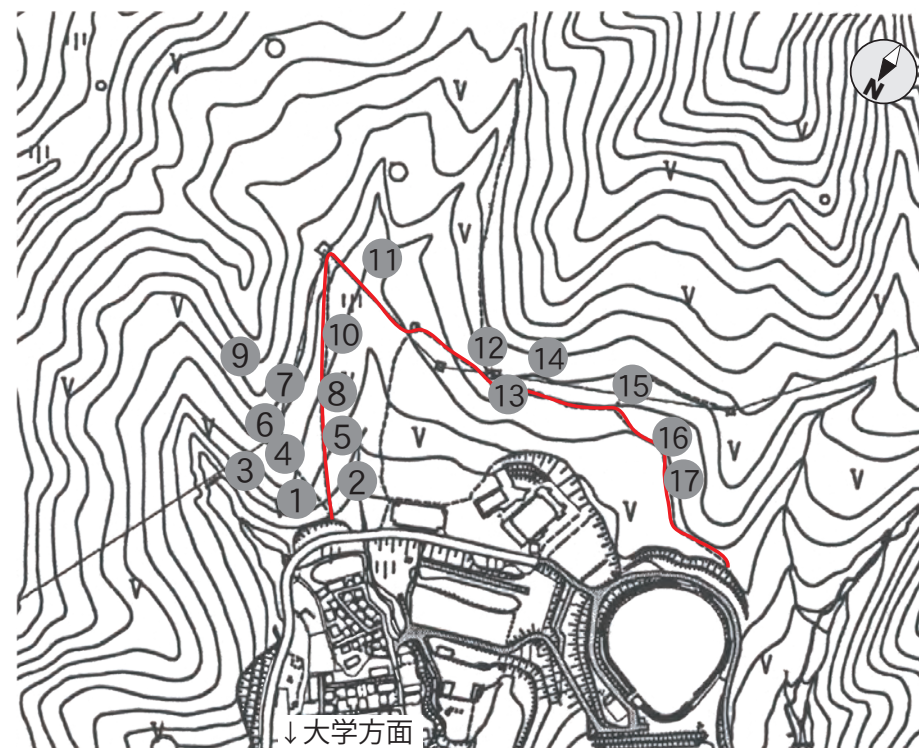


14 キジバト  
スギ、ヒノキの林のなかから鳴き声がすることが多い (2015.3.28)

# 鳥を探すうら山歩き



うら山に入ると聞こえてくる鳥の声。1時間くらいの散歩コースで、今日はどんな鳥に出会うことができるのだろうか。そんなことを思いながら私は山に入っている。



- 1 ウグイス
- 2 アオゲラ
- 3 ヒヨドリ
- 4 コゲラ
- 5 アカゲラ
- 6 ゴジュウカラ
- 7 ヤマガラ
- 8 コガラ
- 9 キビタキ
- 10 シジュウカラ
- 11 エナガ
- 12 アオバト
- 13 サンコウチョウ
- 14 キジバト
- 15 ミソサザイ
- 16 カケス
- 17 カラス

赤色の線がふだん私が歩いているうら山のコース。図中の数字は今までに見たことのある鳥の種類と場所

私は昔から山を歩くのが好きだ。うら山にもよく足を運んでいる。歩く理由はだいたいが鳥を見るためだ。

うら山を歩くとき目線はずっとすぐよりも少し上だ。木の枝が伸び、葉が茂っているあたりを見ながら歩いている。このときは、あまり特定の何かに集中していない。ぼーっとと視界を広くしながら歩いていることが多い。こうしているほうが、視線の先で何か動いたときに気づきやすいような気がして、いつのまにかこうなっていた。

## 鳥を探す

歩くときに気をつけているのは、耳を澄ませることだ。風で木の葉っぱが擦れる音。虫の鳴き声。いろんな音を聞きながら歩いている。鳥の鳴き声が聞こえてきたら立ち止まって、声が聞こえてきた方向に目を向ける。鳴いているうちに、声をたよりにしておおまかな位置を予想する。鳴いているあいだに姿を見つけられるのは運がいいときだ。鳴き声だけでは場所がわからず、見つからないことも多い。そんなときは鳴き声が止んだ瞬間がチャンスだと思っている。経験上、鳥は鳴き

止んでから飛んで移動することが多いからだ。だから鳴き声が止んだときは、声のしたところの一点でなく、鳥がいそうな木をおおまかに見る。そうすると、ぴよんと枝から枝へ少しだけ動いたり、飛んで別の木に移動したりする鳥を見つけることができるのだ。

葉が茂る春や夏は姿を見つけるのが難しい。だから鳥の動きだけでなく枝や葉っぱの揺れにも注目して探している。

## 自分だけの地図

そんな歩きかたでのうら山歩きも、今年で3年目になった。3年目にして初めて出会う鳥もいれば、毎回見かける鳥もいる。歩くたびに、どんな場所にどんな鳥がいたかという情報が増えていく。こうしてうら山を歩き続けていると、自分だけのうら山の鳥マップができていく。

うら山に行けば、これからもマップの情報を増やすことができる。そしてまた自分だけの地図に入る情報が詳しくなっていく。それが楽しみでまたうら山に入るのだ。



2016/6/14

オオヒラタシデムシによく似た虫。うら山に入っ  
てすぐ目に入ってきた。交尾をしようとしていたのか  
二匹が取っ組み合いをしている。けれどすぐに一匹  
が逃げて、二匹は散りぢりになってしまった

## かさなり合う

ヘニコメツキに似ている虫。葉のうえで二匹が上下  
にかさなっている。交尾をしているように見えた



2016/6/14



2016/6/14



## 子育てする

葉っぱが丸まっていたので不思議  
に思って開くと、なかにはクモの親  
子がいた。「親子で安寧の地を築い  
ていたのに」と思うと申し訳ない気  
持ちだ



2016/5/25

コモリグモの仲間。右の写真は卵のう  
を抱えている親グモだ。はじめはおし  
りのあたりについてたのだが、私が  
触れたことで外れてしまった。外れた  
卵のうをすかさず抱えたようすからは  
親の必死さがうかがえた

アップで写っているのは卵のうと子ど  
もたちだ。子どもの体は透明だった。  
親グモのおしりから外れた衝撃で驚い  
たようだ。穴から数匹逃げ出している

虫の生活を知りたいと思うまで  
は、うら山へ行っても目に入るのは  
草木ばかりだった。けれど、虫に対  
する興味が、私を虫の世界に近づけ  
た。今まで気にかげずに歩いてい  
た遊歩道の落ち葉の影や、植物の  
葉の裏に虫の姿を見つけられるよ  
うになったのだ。

虫の視点になつて木の葉やあしも  
とにある石の裏をのぞいてみたら、  
そこでは虫が生活を営んでいた。虫  
たちは人と比べたら、小さな空間で  
生活している。けれど、やり方や場  
所はちがっても、虫は私たちの日常  
と同じように排泄したり、子育てし  
たりして生活していた。

私が踏み出した一步の範囲にたく  
さんの虫が生きている。生きている  
虫の数だけ、私の見えない暮らし  
がたくさんある。そう考えたら、広  
げた両手の幅しかないうら山の遊歩  
道が、大きく広がって見えた。

## ムシの暮らしを のぞいてみると



私にとって一番身近な生きものは虫だ。けれど、小さいから  
か、彼らの暮らしは目を凝らさないとなかなか見つからない。

高橋未瑠来(社会学科3年)=文・写真



2016/4/19

ピロードツリアブ。ハチのよ  
うに見えるが、アブの仲間だ

ヨコヅナサシガメの幼虫の越冬。楽山公園入口付近  
にある木の洞にいた。彼らは口吻を刺して相手に毒  
をおくる、ちよつと危険な虫だ。直接触れないよう  
に気をつけて観察した



2016/3/13

## 暖をとる

うら山の遊歩道でピロードツ  
リアブを見つけた。じつと  
して翅を動かさない。しばらくすると  
とおしりから黄色い液体を落とし  
た。「おしっこした!」。感動してい  
るあいだにその瞬間を撮影し損ねて  
しまった。それから動かないピロー  
ドツリアブを持ち帰り、しばらく観  
察することにした。すると、20分ほ  
ど経ったところに翅を動かすはじめ  
た。目で追える動きからだんだんと  
加速していく。数秒もしないうちに  
ふわりと飛び立っていった。生きも  
のに詳しいかたに聞くと、虫は成虫  
になってまもないころに尿を出すこ  
とが多いという。あのピロードツリ  
アブは成虫になったばかりだったの  
かもしれない。



ピロードツリアブが残した  
黄色の液体。直径1cmにも  
満たないが、ピロードツリ  
アブの身体の大きさを考え  
ると、かなりの量に思える

私は、はじめから虫に興味を持っ  
ていたわけではない。興味をもった  
のは虫が冬眠するという話を聞いた  
からだ。そのとき、私は虫が寝るよ  
うすを想像できなかった。どんなふ  
うに寝るのかを知りたい。そう思い、  
うら山へ探しにいった。今年の2月、  
じつさいに冬眠している虫を見つけ  
た。すると、みんなじつとしていて  
寝ているのか死んでいるのかわから  
ない。確認のために取り出すと、の  
そつと動いたり、驚いたのかびくび  
くと動いたりした。虫の寝起きは私  
の寝起きと似ている。そう思うと虫  
が身近に感じられた。

冬眠のほかにも、虫が排泄したり、  
子育てしたりするようすを知りたく  
なった。暮らしの一つひとつを観察  
していけば、虫が一日どのように暮  
らしているのかを想像できるはず。  
そうすれば、虫をより身近に感じら  
れると思つたのだ。虫の暮らしを探  
ろうと、何度もうら山へ通うようにな  
った。



糸が数本引かれている。これも立派な巣のひとつだ



シート状の巣



木の陰にひっそりと張られた球状の巣

# 多彩なクモの巣



4月29日、初めてうら山を散策した。  
リスが食べたクルミの殻。動物の足跡。姿の見えない鳥の鳴き声。多くの発見や驚きがあった。  
そのなかでも一番印象に残っているのはクモの巣だ。その日、私のクモの巣へのイメージはがらりと変わった。

杉浦茜（国文学科1年）＝文・写真

うら山を歩いている途中、視界の端で何かがきらきらと光った。なんだろうと思いつつ、そちらに目を向けてみる。すると、クモの巣に日の光が反射してかがやいていた。カメラを向けてレンズ越しに見てみると、さっきまで白色だったはずのクモの巣が、あざやかに色づく。ピンク色のクモの巣は、まるで芸術品のようだ。クモの巣といえば、廃墟にあるような暗いイメージがあった。そのため、こんなにも綺麗なものだとは思わなかった。

そんなクモの巣を眺めていると、あることに気がつく。ふだん、通学途中に見かけるクモの巣と形は似ているものの、なんだか雰囲気が違うのだ。

疑問に思い調べてみると、クモは種類だけでなく性格によっても巣の張り方に違いが出るらしい。神経質なクモは細かく均整のとれたクモの巣を。面倒くさがりやなクモは荒く乱雑なクモの巣を張るという。クモにもそれぞれ性格に差があり、それが巣にもあらわれてしまうなんて、なんだか私たち人間のようだな、と親しみを感じた。通学路にあるク

モの巣は、均整のとれていない乱雑なものが目立つ。私の周りに住んでいるクモは、面倒くさがりやが多いのだろうか。

また、クモは2、3日を周期に巣を作り直す。なかには毎日作り直す働き者までいる。注意して観察してみると、同じ場所にあるものでも日によって少しずつ形が違う。どんなに綺麗なものでも、数日経ってしまえば無くなってしまう。今日見つけた美しいクモの巣が、明日もあるとは限らないのだ。

私は今まで、道端のクモの巣に目を向けることなく通り過ぎていた。だが今回の散策でクモの巣の魅力に引き込まれた。それぞれの個性、美しさ。じっくり観察してみると、とてもおもしろい。そんなクモの巣を、今では探しながら歩いてしまうほどだ。

【参考書籍】  
大崎茂芳  
『クモの糸の秘密』  
岩波ジュニア新書 2008年

# アートで届ける 山野草の魅力

サイクルセンターカワベという自転車屋さんの店主、川辺健一さん(77)は、歩くだけではない山の楽しめかたを知っていた。



川辺さんのお店を初めて訪れたとき、一枚

の絵を見つけた。描かれていたのはマムシグサという、うら山でも見ることが出来る山野草だ。筒状の形の葉や真っ赤な実が特徴で、その毒々しさから私も知っている山野草のひとつだった。葉脈の一本いっぽんまで丁寧に描かれているその絵は、本物そっくり。マムシグサですね、と伝えると、よく知ってるねと川辺さんがおっしゃる。これをきつかけに会話がはずみ、山歩きが好きだということ、絵を描いたのは川辺さんご自身だということがわかった。

川辺さんは35歳くらいから、弟さんの影響で山歩きを始めた。どこの山を歩くのかうかがうと「このへんだよ。ほとんど女房とふたりで。休みにはどこも行かないで、おにぎり作って山へ登る」と笑顔でおっしゃった。だから絵のモチーフに山野草が多いのかと納得した。でも絵に入ったのはそれからだいぶ後だね、と川辺さんは言う。本格的に植物の絵を描き始めたのは、仕事が落ち着いた48歳のとき。初めは「絵が描ければなんでもいい」という思いで始めたそうだが、今では教室を開くほどの腕前だ。

川辺さんはじつさに山へ行ったり、植物

を自宅に持ってきたりと、実物を目の前にして絵を描く。描き始めたら、ひたすら忠実に描くことに集中するそう。なんといっても驚くのは、色鉛筆で着色しているということ。薄く何度も塗り重ねることによりリアルな質感を表現できるという。「うまーく色をつけるとなにして描いた？」って言われるくらい（リアルに描ける）と誇らしげに川辺さんはおっしゃった。



ホウチャクソウの絵

川辺さんにとって山野草の魅力はなんだろう。

うかがうと「人が見ても見なくても、山のなかで誰にも見られないで咲いてるっていうのがいいね」とおっしゃった。園芸種のような華やかさはなくとも、自分の力でひっそりと花を咲かせる。そんな山野草によきを見出せる川辺さんの見方はすてきだ。初めて絵を見たときとてもリアルだと思った。今はそれだけでなく、絵から植物に対する川辺さんの優しいまなざしも感じる。川辺さんの目には、こんなふうにマムシグサが映っているのかと思うと、私もそんな目がほしくなった。それから少し後、うら山でマムシグサを見つけた。相変わらず毒々しい姿だと思っただけ、いつもより長く目がとまった。私はまだ川辺さんのように山野草のよさをはっきりとは語れない。でも川辺さんの絵や言葉を思い出すと、誰にも見られずに生えているマムシグサも悪くないと思う。川辺さんの目に、少しは近づけたような気がした。

川辺健一氏 絵

伊藤瑠依（社会学科4年） 文



ニホンカモシカの頭骨。ニホンジカとは異なりツノは生え替わらない



イノシシの頭骨。歯はすり減っていないため若い個体だろう(2013.12.3)



ニホンリスの食事場(2013.5.21)

# うら山を歩く楽しみ

身近なうら山でも生きもののたちの息吹を感じることができます。そこは、いつでも誰でも自由に学ぶことのできる生きた博物館です。

大学のキャンパスを囲むように広がる森をわたしたちは「うら山」と呼んでいます。校舎から歩いて5分ほどで森に入れることから、自然関連の授業や観察会でも活用しています。雑木林と植林地が混在しているうら山はけっして珍しい森ではありません。

わたしはこの森を歩くのが楽しみの一つになっています。動物が森で暮らす技や知恵を学ぶことができます。

昼間の森ではなかなか動物に出会う機会はありません。そこで動物が暮らしている証拠となるさまざまな痕跡を探しながら歩くことになります。たとえばニホンリスが食べたクルミの食べ痕もそうです。ニホンリスは、堅いクルミの殻を溝に沿って2つに割って中身を食べます。

わたしにこうしたことはできません。しかしニホンリスは、経験を繰り返しながらクルミの中身を食べる最適な方法を身につけて

す。栄養価の高いクルミをどうしたら余すことなく食べられるのだろうか？ニホンリスが食べたクルミの痕は、クルミの溝にそって割ると中身を残さず食べられる、というニホンリスからの解答です。

森のなかでは思いがけない出会いもあります。現在ではほとんど水が流れない谷底で2013年、イノシシの頭骨を見つけたのです。うら山では初めての経験でした。このイノシシの頭骨の長さは40cmほど。うら山ではイノシシが掘った大きな穴をよく見かけましたが、頭骨のつくりを見てみると、どうしてもそのようなことができるのかすぐに納得できませんでした。牙のある鼻先は細長く、骨に厚みがあり頑丈なつくりをしています。頭骨の重さは下顎も含めて2kgありました。大きなもので70kgほどの体重があるイノシシは、この重い頭骨を使って地上だけでなく地中の食物も得ることができるのです。

じつは、イノシシはカモシカやニホンジカと同じように近年になってうら山で姿を見かけるようになった動物です。戦前にうら山で馬を使って木材の運び出しをしていた清水

貞一さん(93)にうかがうと、当時はイノシシもカモシカもニホンジカもうら山では見たことがない、と言います。どうして近年になって姿を見かけるようになったのかその原因は今のところよくわかりません。わたしにはまだまだ感じ取れない大きな変化が自然のなかで起こっているようです。

わたしが身近な野生動物の技や知恵に学びたいと思うのは、彼らがわたしたちよりはるかに長く森で暮らし、森との関係を築いてきたからです。

うら山を歩き観察するのに特別な機材は必要なく、動物をおびやかすこともありません。そして専門家でなくともいつでも誰でも自由に学ぶことができます。わたしがうら山での動物の痕跡探しを楽しんでいる理由もここにあります。



イノシシの牙。小指が入りそうな空洞がある

北垣憲仁(本誌発行人)＝写真・文

## うら山の鳥事情

## 夏鳥と希少種

H・D・ソローが『ウォールデン 森の生活』（今泉吉晴訳、小学館）で示唆した散歩のほんとうの意味とは何か。散歩をとおして見えてくるものとは。私たちは歩くことで、変貌する自然やまちの今を記録し、フィールド・ミュージアムのたのしみを報告していきます。今回は、本学のうら山で春から夏に見られる鳥類と希少種をご紹介します。



ミソサザイ

は、広い面積の森林がないと生息できないとされています。このような種がいるうら山は、奥行きのある森林だと気づけるわけです。遊歩道に沿って歩くと、沢を渡る場所が何箇所かあります。このあたりの沢は、雨のあとには水が流れているものの、多くは水のない枯れ沢です。この沢でミソサザイが見られることがあります。ミソサザイは山地の水の流れている沢や谷ではよく目にしますが、枯れ沢にも1年中生息していることをうら山で初めて知りました。

足しげく通うことは、観察記録の蓄積になります。「いる・いない」や「多い・少ない」は、何度もそこを訪れないとわかりません。また、うら山の特徴を知るには、ほかの場所と比較することも必要です。たとえば、都留市内の同じような条件の山とくらべてどのような違いがあるのかも、今後調べてみたい事柄です。

## うら山の価値を知るために

イソヒヨドリは海岸沿いに多く生息している鳥類ですが、近年は内陸部で繁殖する例が増えています。2016年5月には、うぐいすホールの周辺でイソヒヨドリが観察されました。長く観察を続けることで、身近な自然の変化に気づくことができます。イソヒヨドリが定着すると、どのような影響があるのか気になるところです。

ところで、うら山には動物の生息状況調査の目的でセンサーカメラ（本号26ページ参照）が設置されています。このカメラでは、環境省のレッドデータブックで絶滅危惧種となっているミゾゴイが撮影されました（『フィールド・ノート』79号参照）。ミゾゴイはサギの仲間、森林に生息する夏鳥です。撮影さ

西 教生（本学非常勤講師）＝文・写真



センダイムシクイ



キビタキ



ヤブサメ



サンコウチョウ



アオゲラ



クロツグミ

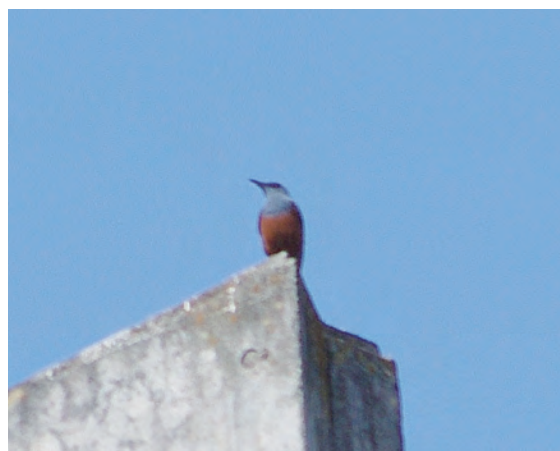
定期的に生きものを観察する場所は近いほうがいいと思い、本学のうら山に通うようになったのは2003年からです。四季を通して歩くとさまざまな生きものに出会い、その季節ごとの楽しみがあります。

私はおもに鳥類を観察の対象としているため、たとえば春先はアブラチャンやミツマタの花が咲き終わるころに渡来する夏鳥のヤブサメを心待ちにしています。その後、キビタキやセンダイムシクイなどの夏鳥のさえずりが聞かれるようになり、季節が変わったことを察知します。それでは、春から夏にうら山で観察できる鳥類を見ていきましょう。

## 枯れ沢のミソサザイ

うぐいすホールや楽山球場から尾崎山への連なりは、標高を上げながら植生が変化していきます。一般的に環境が変わると、そこで見られる鳥類の種類が異なります。

本学周辺にはツバメやスズメ、ムクドリなどの市街地でよく見られる鳥類がいて、林内に入るとクロツグミやアオゲラ、サンコウチョウなどの森林性の鳥類が生息しています。クロツグミをはじめとする森林性の鳥類

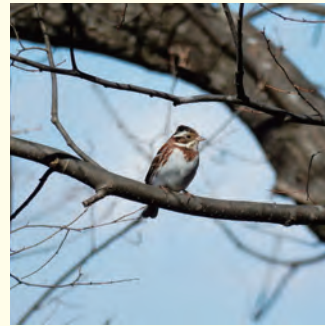


イソヒヨドリ



ニホンリス

ニホンリスが木をよじ上っていくところに遭遇しました。このあと木の枝のつけねで体を丸めじっとしていました。 うら山 (2016.03.31)



カシラダカ

冠のような頭の羽が特徴的。おもに地面でえさをとります。群れで行動することが多く、明るい林などを好みます。 うら山 (2016.03.02)



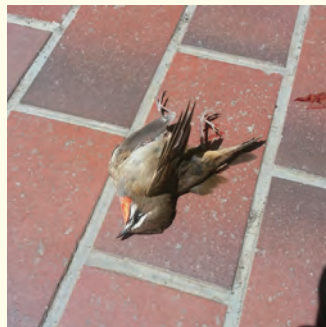
タカチホヘビ

夜行性の動物ですが、この日は日中に見られました。地色は黒紫色で、青い光沢のあるつぶつぶとしたウロコをもち、背中の中央には黒い縦線があります。 本学 (2016.05.18)

## フィールド暦

暖くなり、彩り豊かになった  
春のうら山とその周辺。  
そこで見つけた生きものたちを  
紹介します。

本学フィールド・ミュージアム＝文・写真



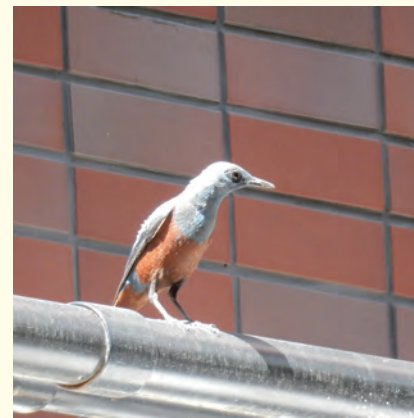
ノゴマ

学生食堂の近くで見つけました。どうして死んだのかは不明です。春になると東南アジアから北のほうへ渡っていきます。 本学 (2016.04.19)



アカゲラ

木から木へ飛び移っていました。キツツキの仲間で、白と黒の体をしています。後頭部が赤くないためメスとわかります。 うら山 (2016.03.29)



イソヒヨドリ

海沿いで見られる鳥です。1号館のそばで出会いました。ここ数年、都留市内での目撃情報が増えていて、谷村町のほうでも見かけることがあるそうです。 本学 (2016.06.02)



アオゲラ

守衛室前に落ちていて、見つけたときはすでに死んでいました。後頭部の羽が赤いためオスとわかります。 本学 (2016.06.11)



ヒメツチハンミョウ

青緑の光沢のある体は日に当たるとつやが出て、きれいです。ハナバチの幼虫や花粉などを食べています。 うら山 (2016.04.21)



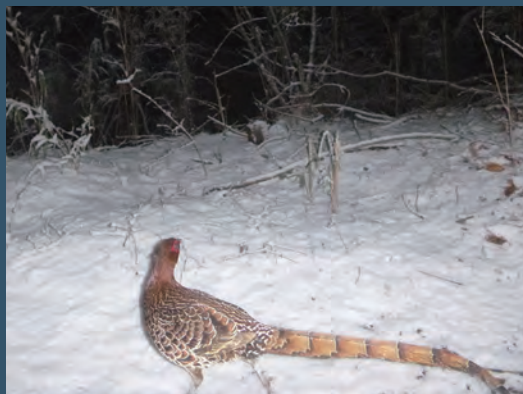
キアシドクガの蛹と成虫

ここ数年、大発生しています。今年は自然科学棟の南側の壁にたくさんの蛹がついていました。名前にドクとついていますが、毒はありません。 本学 左：(2016.05.28) 右：(2016.05.25)



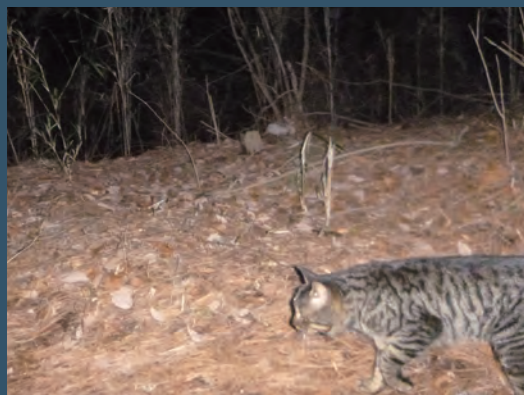
アナグマ (2016.03.13)

冬眠のためか、12月から2月は撮影されず、3月ごろから写りだします。ただ、アナグマは地域によって冬眠しない場合もあります。



ヤマドリ (2016.03.15)

鳥類で撮影されやすいのは地上で生活するヤマドリ、ついでトラツグミなどの地上でエサをとる種です。



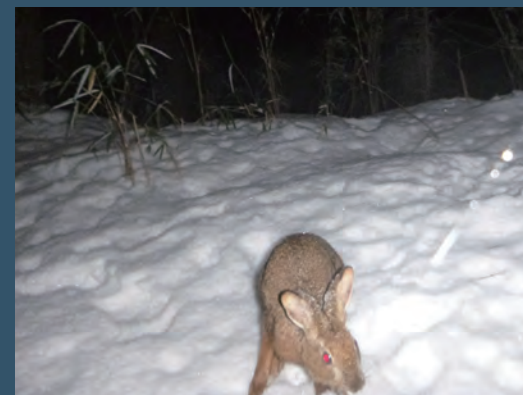
ネコ (2016.03.20)

野ネズミをくわえた姿が撮影されることもあり、生態系への影響が少し気になるところです。



ニホンカモシカ (2016.04.02)

うら山では2015年10月以来に撮影されました。この設置箇所では初めての撮影です。



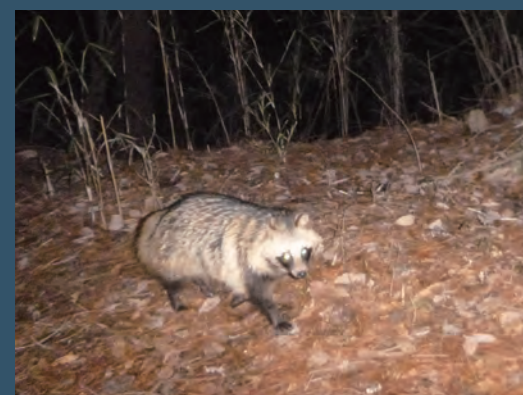
ノウサギ (2016.01.23)

降雪があると後足が前足の前に出る特徴的な足跡が残るので、姿を見なくとも存在を知ることができます。



キツネ (2016.02.04)

おもに夜行性といわれますが、昼間10時から11時に活動している様子も撮影されています。



タヌキ (2016.02.10)

ずんぐりとした体つきに見えるタヌキも、左ページにある疥癬<sup>かいせん</sup>の写真を見ると、じつはほっそりとしていることが分かります。



テン (2016.02.14)

糞をほぐしてみると、鳥類や小動物の骨、植物の種子など多様な食性を観察できます。

# 見てみよう 夜のうら山 —センサーカメラが写した動物たち—

本学フィールド・ミュージアムでは、本学のうら山にセンサーカメラ（動物の体温を感知すると自動でシャッターが切られるカメラ）を設置して、動物の調査をしています。今回は1月～4月に撮影された動物たちのなかから、とくに、夜のうら山にあらわれた動物たちの姿をご紹介します。

『フィールド・ノート』編集部 = 文・写真

## 毛のないタヌキ？

センサーカメラに写った、毛の一部が抜け落ちているタヌキ。これはヒゼンダニ<sup>かいせん</sup>類が動物の皮膚に寄生することでおこる「疥癬<sup>かいせん</sup>」という症状によるものです。この症状になるととても皮膚がかゆくなるため、動物たちは毛が抜けるほど皮膚をかいてしまい、このような姿になってしまいます。こうなると健康な状態とはいえず、生活することも難しくなるようです。



タヌキ (2016.03.15)

# 畑と、ていさん



作った畝の隣でひと休みをするていさん (2015.10.12)

農業はなんといっても経験と勘がものを言う。経験も知識もない学生は、農業をやりたいと集まってもなにかと悩みが尽きない。そんなとき、通りすがりにアドバイスをしてくれる、笑顔で、闊達<sup>かつた</sup>なていさんは御年93歳だ。ていさんに教わった、畑や野菜との付き合いかたがある。

自分で食べるものを自分で作る人に憧れて、去年の4月から十日市場の畑で野菜を作っている。この畑へ行く道沿いに、ていさんの畑はある。ていさんは、経験が浅い学生に向けて「今日は陽が強いから、さつまいもは植えないほうが良い」、「昨日は雨が降って土が湿っているから、マルチ（畝の上に被せる黒いビニール）をはつたら良い」など、天候をよんでアドバイスをしてくれる。

『ていさん』とは、私たちが呼んでいる愛称で、本名は清水貞一<sup>しみずていいち</sup>さん。都留で生まれ都留で育った。今も毎

## 特集まとめ あなたのそばにも『うら山博物館』



いよいようら山の出口が見えてきました。今日見つけたのは、ハート形の葉をもつスミレや、卵を抱えたクモの親。

もっと身近でもおもしろいものがたくさん見れたらいいのにと、家の庭でも探してみます。

草に近づいてみたり、足元をじっくりながめてみたり、周りの音に耳をすませてみたり。

そうやって見つけたものは、虫がせつせと歩くようす、親子で鳴き合う鳥の声。おもしろいものは、身近なところにもたくさんあるのです。

博物館になるのは、なにもこのうら山だけではありません。どんなところだって、見方しだいで博物館にできるはずです。

次号では私たちの身近にある自然に、もう少しだけ近づいてみます。

特集『うら山博物館』、つづく



左：「いもにかかるとやけちゃうだよ」と言いながら鶏糞を撒くていさん 中央左：いつもていさんのポッケに入っているあめ

中央右：交互に並ぶ里いもと米ぬか。里いもに米ぬかが直接かからないようにする 右：ていさんの言うひと握りの米ぬか  
(2016.04.23)

日畑に自転車来て、何種類もの野菜を作っている。いつもにこにこしていて元気なので、なんでそんなに元気なのか一度たずねたら「昔、ミズをたらふく食べただよ」と言っ

てにっと思った。  
4月23日、私は今日も自分の畑へ水をやり、十日市場へ自転車を走らせた。とても良い天気だ。高速道路の下の特産物を越えて、十日市場の畑が広がる道に入っていく。もう田んぼに水を入れているところがあり、10羽ほどのツバメが、巣の材料やヒナの餌を集めるため、忙しうに飛びまわっていた。田んぼを覗くと、ミジンコやホウネンエビ、オケラやミズガがちらほら見えた。

夏野菜の水やりが終わり、ていさんの畑を覗くと、オレンジ色の帽子が見えた。「こんにちは」と言うと、いつも「おう」と返してくれる。「何しに来たでえ」と言うので「ていさ

んに会いに来ただよ」と返す。「そうけえ」と言いながら草をむしるていさんの横で、草と一緒にむしる。ていさんは畑を移動するとき、ただ歩くだけでは終わらせない。足元にある草を抜きながら、歩く。だからていさんが歩いた後は、草が生えていないのだ。ゆっくり、ゆっくり、ぶち、ぶち、すぽん。

「ていさん、今日は何植えるの?」「今日は、里いもを植えるだよ」  
ていさんの里いもは、とっても美味しいと評判だ。去年の10月、お米の袋いっぱい里いもをいただいたて、学生で芋煮会をした。ほろっとねばっとした里いもは出汁をよく吸って、お肉より里いもの取り合いになった。

里いもは、クワで掘った一本の溝に、30cm間隔ぐらいで並べて置いていく。置き終わったら、その里いもと里いものあいだに、肥料となる米ぬかをひと握り入れる。ひと握りと

言っても、どのくらいあげれば良いのかわからず「ひと握りつてこのくらい?」と聞くと「良い良い、大丈夫、どんどんやってけし」と笑いながらの返事が返ってきた。

米ぬかを入れ終わったら、鶏糞を撒く。始めに溝を作ったときに、すくって手前にあげておいた土を、里いもと米ぬかの上に戻して、平らにする。そのあと、袋に残っている米ぬかを、土の上に均等に撒いて、最後にその上から土をかぶせて、低い畝を作った。

ひと仕事おえて、ふーと息をついたら「ちょっとおやすみにしましう、おやすみ、おやすみ」とていさんが言うので、あぜみちに二人で並んで座る。「どっちがいいづらかあ」と、ポッケからごそごそ、ハッカあめと黒糖あめを取り出してくる。私は黒糖をいただいて、カラコロとなめた。ていさんは「それはちと甘すぎる、おらはちようどいい、甘さ

もスツとしすぎないのも。あめは腐らないからいいづら」と言って、指をそろえた手のひらにあめを乗せ、ポンと口のなかに放り込んだ。二人で今作った畝を見て「最後が曲がったねえ」「ああ、ほんとうだ」などと言いながら、ぼーっとお休みする。ていさんは、あめをなめながら畑や家族、戦争、馬や山、水、の話など、昔のお話をたくさんしてくれる。

93歳のていさんは、自分で食べるものを自分で作っている。若い世代に農業の指導をし、目に浮かぶほど具体的な昔話までしてくれる。しかし、本人は『今はもう、朝飯食って、お茶飲んで、1時間ばかり畑いじってお昼食べて、ひと寝入りして、また畑に行くだよ、ふふ、いい生活ずら』と言って笑う。私はこの笑顔を

見て、ていさんはまだまだ現役だと思っ

# 思いがつなぐ

## ハートのシバザクラ畑

赤坂駅と都留市駅のあいだ。富士急行線沿いにあるシバザクラ畑の前で、速度を落として通過する電車が数本ある。以前は、この畑は所有者である奥脇潔さんと妻の梅子さんの熱心な手入れによって見事なハート型をしていた(『フィールド・ノート 66号』参照)。

今村遥香(社会学科3年)=文・写真



2013年4月の畑のようす(武田明子さん=写真提供)

都留インターチェンジをおりてすぐにある、ハートの形に植えられたシバザクラ畑。この畑の持ち主である奥脇梅子さん(78)にお話をうかがった。

現在、残念なことにシバザクラ畑はハート型ではなくなっている。それは手入れをする人が半年ほどいなかったからだ。おもに手入れをされていた潔さんがおとし亡くなってしまい、妻の梅子さんも体調がすぐれず畑へ行けずにいた。それを知った富士急行線のかたが、以前の風景を復活させようと、週末や仕事が早く終わった平日に畑の整備をしている。梅子さんも体調がいいときは、畑へ行って草むしりをしているそう。

### 都留のちょっとした名所

今から12年前、「お米をつくるのは大変だから、これからは花を育てて楽しもう」という潔さんの提案で、お二人で田んぼだった土地にシバザクラを植え始めた。始めは、苗を赤と白でわけて植え、育てた。株分けを繰り返して、3年ほどで畑一面がシバザクラで彩られたそう。ハート型にしたのはそれから2年後のこと。近所の奥さんの「赤と白だけでは

殺風景だからハートにしたらどう?」という提案からだった。

ハート型にしてからというもの、畑でご夫妻が草むしりをしていると電車の窓から手を振ってくれる人や、県外から見にきてくれる人がいたり、週末になれば三脚や脚立をもつて本格的な撮影をするカメラマンがやってきたりと、畑がにぎやかだったという。

### 子どもを育てるように

「もう朝、ご飯を食べきりゃあ、『母さん、畑に草取りに行くべよ』なんて言っちゃあね」と梅子さん。お昼のかねが鳴ると、家へ戻ってきてお昼ごはんを食べ、少し昼休みをして、また畑へ出向く。ビール箱の上へ座っ



控えめな梅子さん。「顔があまり写らないようにね」と照れながら、写真を撮らせてくださった(2016.4.27)

て、畑を眺めては「ああ、ここをもう少しきれいにしたいなあ、がんばるべなあ」と言い、日に二度も三度も畑へ行って、手入れをしていたそう。その熱心さは、まわりの人が感心するほど。潔さんは大変ということを決して口にしなかった。梅子さんはそんな姿を見て、「ああ、わたしも一生懸命、二人でできるうちは頑張ろうねえ」と思っていたそう。

### 畑のこれから

「またもこのようになってねえ、またみんなで楽しめたらいいねえ」と、シバザクラ畑のこれからを語る梅子さん。

取材をしていると、電車の窓からこちらのほうに手を振ったり、畑にくぎ付けになったりしている乗客がたくさんいた。その光景を見て、ご夫婦の「見る人を楽しませたい」という気持ちは、富士急行線のかたへ受け継がれていると思った。今、富士急行線のかたが一生懸命手入れをしているのは、シバザクラ畑を楽しみにしている人たちの期待に応えるためだろう。いつかシバザクラ畑がもとの姿に復活して、多くの人でにぎわう風景を見るのが楽しみだ。

▼現在の畑のようす。畑一面にスギナが根を張っている(2016.4.27)



# 竹細工を作るひと、 もらうひと

最近は、ものづくりという作業を機械に任せることが多い。作り手と会うことが少なくなっているなか、竹細工を通して関係を築いているかたがたに出会った。

山内利奈（社会学科2年）＝文・写真

## 俺の別宅

4月30日、趣味で竹細工を作っているという矢野文昭さん（64）にお話をうかがうため、禾生にある矢野さんのお宅にお邪魔した。

「ここ俺の別宅だから」と矢野さんに言われて案内されたのは、お庭のすぐ隣にある作業場である。そこには、加工が済んだ竹や、まだ途中の竹、私がふだん目にするものない機械がある。それらを眺めていると、矢野さんがさつそく、竹細工の作品を紹介してくださった。いつもは作業場に作品は置かないとのこと、わざわざ家から出してきてく



右：大野さん宅のハナミズキを引き立てている竹細工 左上：矢野さん宅の庭に干されている竹 左下：竹の板を削り表面をなめらかにする作業のようす

さったのだ。矢野さんが作る竹細工はおもに家具で、ほかにさまざまな雑貨がある。

同じ種類の竹でも、1本いっぽんに特徴がある。曲げやすかったり、色が変化しづらかったり。矢野さんは加工の出来にに応じてどの部分に使うかを決める。きれいな色のものはそれを生かして目立つ部分に。表面に出しにく

んがいなかったら技術が向上するスピードも遅かったと思う」

現状で満足しないという食欲な好奇心や向上心は、より優れたものを作るためには欠かれないのだ。

## 大事なものはしまっておかない

お話を聞いたあと、小学生時代の同級生である大野絹枝さん（64）のお宅へと案内していただいた。大野さんは、じつさに矢野さんの作品を飾っているかたのひとりだ。玄関の戸を開けると、お花の台やついたがとでも目立っていたため、すぐに矢野さんの竹細工であることに気づいた。自然の素材だからだろうか、親近感が湧き、つい撫でてしまう。見た目の涼しさにくわえて、なめらかな肌触



大野さん宅にあるスリッパ立て

りは心をなごませてくれる。居間へ移動するとそこにも竹細工があった。ラックとスリッパ立てだ。スリッパ立ての仕切りに使われている板状の竹は、2枚の竹の板をくっつけて1枚に見せている。接着面がまったくわからないため、1枚でできているかのようだ。しばらくして、矢野さんが携帯で撮影した作品の写真を30枚ほど見せてくださった。竹細工を始めたころの作品から最新作まで、色や大きさ、デザインはさまざま。これらはすべて非売品だ。友人のほかに、会社の上司のお孫さんに向けてなど、どれも知り合いのかたに譲っている。

大野さんは矢野さんの竹細工についてこうおっしゃった。「いただいたものをちゃんと飾っておくのが文昭ちゃんに対するお礼じゃない。うちはさ、たくさん人が来るからほめてもらえるのよ。大事なものはしまっておかずに出さないとね」。そうそう、そうなんだよと矢野さんが嬉しそうに何度もうなずく。「具体的にどういものが欲しいか言ってくれないと困るんだよね。どういう場所にとどのくらいの大きさで、どう使うのかね。ここまで来て測ったしね。絹枝ちゃんみたいな存

いものは、削ってなかの板として使う。矢野さんの竹細工は竹のみではなく、木も使われている。そうすることで、より強度が増すそうだ。

## 竹細工は独学で

私が驚いたのは、矢野さんが独学で竹細工を作っていることだった。独学だからこそ柔軟に考えられるし、いろいろな人からアイデアをもらって、ほかにはない作品を完成させられるのだろう。

アイデアをくれる友人のひとりに、小学校の同級生のケンジさん（64）がいる。矢野さんはケンジさんのことを師匠だとも紹介してくださった。車の規格品を作るお仕事をされているケンジさんはものづくりに詳しい。作業場にある一台何十万円もするような機械や道具も、ケンジさんが貸していらつしやるものだ。

「ケンちゃんは工程だけじゃなくて、出来栄えとしてこのくらいまでやらないとダメだって教えてくれる。僕だけではこれくらいだなんて満足しちゃう。レベルの高いところに置かなきゃ成長しないんだよね。ケンちゃん

在がなかったら続けてなかったと思う」と矢野さんはしみじみとおっしゃる。大野さんも作業場に足を運び、作る過程を見ると、玄関に飾るお花を引き立たせるために、うしろのついたてはシックなものにしたい、と色味やデザインのこだわりを細かく伝えるそうだ。こうしてできあがった作品には、お2人の思い出もつまっている。作品を使わずに、その思い出をしまいこんでしまうのは、もったいないなと納得した。大事なものはしまっておかない、この言葉が一番私の胸に響いた。

大野さんが矢野さんの竹細工を大事だとおっしゃることができるのは、前提にこのおふたりの関係があるからこそだと思う。じつさに作る大変さやこだわりをみると、大野さんの作品に対しての思い入れは強くなる。そして感謝の気持ちから、すてきに飾る。それは矢野さんの好奇心や向上心につながるエネルギーになっていて、ではないだろうか。作り手ともらい手が直接関わって作品を作ることは、あまり見られない。私は、こうしてお互いに影響しあって作品がでかがるのを貴重なことだと思った。

# じょいつる市場

—みんなでつくり上げる楽しさ—

「どんなふうにお祭りってつくられているのだろう」という興味から、私はじょいつる市場実行委員会の会議に参加するようになった。そこで出会ったのが、都留市役所職員の立場からじょいつる市場を支える河野淳さん（32）と秋山英一郎さん（28）。お二人がじょいつる市場にかける想いを知りたくなり、4月18日にお話をうかがった。

## 「点」ではなく「面」で

じょいつる市場のコンセプトは、「都留を楽しむ」こと。2015年9月からこれまでに4回開催されている。会場は高尾町通りの三町商店街。そこは、昭和のはじめまでとてもにぎわっていたという。ところが今は、何でもそうスーパーや薬局など、一点の場所に人が集中してしまう時代。本来人が集まるはずの商店街に人が少なくなっている。「一点」だけでなく、商店街「一面」の活気を取り戻したい。スポットが当たりにくい都留の

ユニークな人やものを発信する場所にした。そんな想いをともにする人たちが集まって、じょいつる市場はじまったそうだ。

じつさいに行ってみたじょいつる市場の会場は、とてもにぎやか。焼き鳥やかき氷、パンや洋菓子などの食べ物から、ハンドメイドのアクセサリーまで、多彩なお店がずらりとならぶ。ギターの弾き語りや踊りのパフォーマンスをする場も設けられている。みんながそれぞれの場所で楽しそうにしているのを目にしたときは、私もほんわかとしたあたたかい気持ちになった。

## 実行委員会のように

じょいつる市場実行委員会では、市役所のかた、商店街や近隣の地元のかた、本学の学生が集まって会議をする。とくに大学生は、子どもが遊べるコーナー「つるっこひろば」の企画を任されている。会議を進行する秋山

するときには、実行委員からさまざまな声がかかる。「私近所に声かけてみるよ」と商店街のかた。「俺中学生誘ってみるわ」と中学生とかかわりのある河野さん。「サークルに聞いてみます」と本学の学生。このように、それぞれのつながりから人を集めることができる。そうして、じょいつる市場をつくり上げるための人の輪が広がってゆくのだ。

開催後には、みんなで反省会をする。どうすればもっと人が来たのか、長く会場にしてくれたのか……反省は毎回つきものである。反省の結果、今まで空き地や駐車場のみだった出店場所を、道路に出したらどうか



「つるっこひろば」のようす。おりがみで母の日のプレゼントをつくっている  
(2016.05.08)

## お二人の想い

という出店者のかたの意見を生かすことになった。道路に出店をなればお店自体が目立つし、会場をよりにぎやかにすることができ。「ああすればよかった」の後悔を、「もつといいものにしていけるじゃん！」とポジティブにとらえているのだ。

河野さんは、「俺たちの頭のなかで考えられる内容だったらつまらない。結果がどんなもんになるかわからないものをやってみたかったんだよ」と語る。実行委員会では、みんながやりたいことを形にし、挑戦できる。じょいつる市場は一回いっかが新しいのだ。たき火やひな祭り、母の日など、季節によつて違ったテーマを楽しめるようになっていく。

秋山さんにとつてのじょいつる市場は、「一緒にやって楽しいイベント」だという。今まで秋山さんが取り組んできた町おこしは前例にとらわれ、なかなか自分の意見を反映できなかった。それを商店街の人や学生とやっている、自由な意見がとても刺激になる。学生から「こういうのやりたい」といった意



じょいつる市場について楽しそうに話す、河野淳さん（左）と秋山英一郎さん（右）  
(2016.04.18)

さんはいつもにこにこしていて、学生の意見も尊重してくれる。みんなが堅くなりすぎず、気軽に意見を言うことができる雰囲気だ。

つるっこひろばの遊びを、企画の段階で試しにやってみるのはおもしろい。チョークで道路に落書きをする遊びをやってみたくても、「本当に道路に落書きなんかしてもいいのかな？」という気持ちになってしまう。ここで頼りになるのが河野さんの行動力だ。「よし！水で消えるかどうか試してみよう！」と言って水で消えるのを確認すると、企画を実現させてくれた。

また、出店者や路上パフォーマンスの募集を



じょいつる市場の会場のようす。出店からおいし  
いにおいがただよう  
(2016.05.08)

欲が伝わると、どうにか実現させたい気持ちになるそうだ。

\* \* \*

どうすればもつとよいイベントにできるのか。課題はたくさんあるのかもしれない。それでも、河野さんと秋山さんをはじめとする実行委員会は、じょいつる市場の運営を心から楽しんでいて。企画する人たちが楽しんでつくり上げるイベントだからこそ、その想いが伝わり、訪れる人を笑顔にすることができると私は思う。

窪田りさ（社会学科2年）文・写真  
じょいつる市場実行委員会 写真

教えてください！

遊びの思い出

最終回

## 話し上手は自分の身近に

長尾泉（初等教育学科3年）Ⅱ文・写真



都留に住むかたに、遊びの思い出をお聞きする連載の四回目。最終回の今回は、小学校のころから一緒に遊んでいたという夫婦に当時の思い出をうかがった。

5月12日、小形山に住む堀野綾子さん（86）を訪ねた。引き戸をあけてこんにちは、と声をかける。昔遊びの思い出が聞きたいと申し出ると、快く「いいわよ」と答えてくださった。



今回のお話の舞台、稲村神社

### お宮さんはかくれんぼの森

小学生のころの遊びについてうかがうと、最初に出てきたのはかくれんぼの話。どこでやっていたのか聞くと、稲村神社だという。稲村神社は、尾県郷土資料館に隣接する神社だ。大きなエノキの木が目印。今では駐車場が整備され、ひらけた場所になっている。けれど、綾子さんが小学生だったころは、両手を回しても抱えきれないようなケヤキやスギ、エノキの太木がたくさん生えていたそう。想像してみると、それはまるで薄暗い森のよう。そのため隠れる場所に困らず、かくれんぼをするにはもってこいの場所だったのだ。

前に取材したかたのなかには、当時男の子と女の子が一緒に遊ぶことはなかったというかたもいた。そこで、綾子さんはどうだったのかと思い、同じ質問を試してみた。すると小学校の1、2年生までは、男の子も女の子も一緒になってかくれんぼをしていたとおっしゃる。学年が上がるにつれて一緒に遊ぶことはなくなっていたのだそう。異性と一緒に遊ぶのはちょっと恥ずかしいという。



今はひらけている駐車場。奥に見えるのが尾県郷土資料館

て笑っていた。私もつられて声を出して笑ってしまう。

稲村神社では、かくれんぼのほかにも男の子はメンコ、女の子はあやとりをして遊んでいたそう。「単純な遊びだったけどねえ、でもけっこう楽しくてね、思い出になっていますよ」と懐かしむように、綾子さんは首を少し左に傾けて目を細めた。

### 祭りでの大事件

5月25日、日をあらためて堀野さんのお宅を訪ねた。この日は旦那さんである、義春さん（86）も一緒だ。再び稲村神社での遊びの話になる。話し始めてすぐに稲村神社の名前が出るくらい、お二人にとって身近で思い出深い場所なのだろう。

稲村神社では当時、春の4月15日と秋の9月3日にお祭りをしたそう。そのなかでも、秋のお祭りのできことを教えてくれた。

秋のお祭りでは、青年団の男の子たちが芝居をした。『忠臣蔵』とか、『弥次さん喜多さん』（※）やったりして」と綾子さん。脚本は地域のおじいさんたちに聞きながら考えたそう。神社の横に小屋を建てて、そこで上演したの

だという。

聞いていて一番おもしろかったのは、芝居の小道具の話だ。かつらも手作りだったのだそうだが、その素材はトウモロコシのひげ。それを集めて束にして頭にかぶったら、もうかつらのできあがりだ。話しながら体を反らし、顔を上に向けてながら笑う綾子さんを見ていたら、当時じっさいに見ていた人たちは大盛り上がりだったのだろうと、にやにやしてしまつた。

当時の小形山地域では、短刀をお守りとして持っている家庭が多かったという。芝居で使うだけならそのまま持つていけばよかったのに、男の子たちは張り切つて刃を研いでいったらしい。芝居が始まると、それを見るために子どもたちの家族はみんなぎざぎざを持つていつて、お宮さんの庭がいつぱいになったそう。男の子たちは芝居で本気になつちやつたのかねえ、相手の膝を切つちやつたの！」と綾子さんは顔にくつと力を入れて口



稲村神社のご神木の大エノキ。当時はこのくらい大きな木が生い茂っていたそう



話しているときのこの表情が、聞き手を思い出のなかに引き込んでいく

昔の生活や地域のように、人の思い出は話を聞いて想像することしかできない。それでも私は、話を聞きたいと思う。それは、話すことで、その人だけの思い出を自分の頭のなかに思い描くことができるから。聞きながらその場にいるような気持ちになるくらい、みんな話すのがうまいのだ。

遊びの思い出を覚えてくれたおじいちゃん、おばあちゃんに共通していたこと、それは話すときの目や表情だ。全員が同じ顔をしていたということではない。みんな当時の自分を思い出して、おじいちゃんは少年に、おばあちゃんは少女に戻ったように、遊びの思い出を話してくださった。手を広げてこのくらい、と遊び道具の大きさを教えてくれたり、身を乗り出してそのときのようすを覚えてくれたり。ときには少し照れたように口元を手で隠してへっつと笑いながら、恋の話をしてくれた。

そしてそんなおもしろい体験してきた人が、今目の前でいきいきとそのときの様子を語ってくれている。こんな贅沢なことはない。

私にとって、どんなに有名な人の講演よりもずっとおもしろい。

遊びの思い出を聞き始めたころは、昔遊びを知りたいから取材していた。でもだんだん、おじいちゃんの俺の活躍した話を聞いてくれよ、というような表情や、おばあちゃんたちのひとつの話からどんどん繋がっていくような数々の思い出話に引き込まれていった。それに、話に出てくることがあまりにもかけ離れた世界のことではなく、自分でも経験したことがあるようなものだから、「そうそう、私もそんなことあったな」というふうに、自分の思い出と重ねられるのだ。

遊びの思い出を覚えてくれたかたがたがしてきた遊びはそんなに珍しいものではなく、ほとんどの子がやったことがあるようなふつうの遊び。それでも、話し手の表情や仕草、声によって、同じ遊びでもその人だけの思い出話になった。

自分の知っているあの人も、もしかしたらとんでもない武勇伝をもっているかもしれない。目の前にそのときの情景がぼつと浮かぶように話してくれるかもしれない。そう思うと話を聞きにいかずにはいられないのだ。

※『湯の町エレジー』：昭和 23 年ごろのヒット曲

を縮める。なんて痛そうな事件だ。「みんな（足を切られた子に乗せた）雨戸の担架を担いでいったの。でもみんなひげをつけたり、顔を塗ったくったりしてるのね。おしろいとか、口紅とかお母さんに借りて、すごいカッコした男たちが病院連れてくの。それを周りにいる人たちはなんだなんだ？ って見るのね」。

「血がいつぱい出たときはびっくりしましたよ」と痛そうな顔をして言う綾子さん。「それでね、見たおじさんたちが『ああうまいもんだなあ、ほんとみたいだ』 って目を見開いて。ほんとだもん」。

今では笑い話のように話す綾子さんも、話しながら鼻の頭にしわを寄せた。じつさいに見ていたらどんなに怖かっただろう。そう考えたら私まで綾子さんと同じように顔に力が入っていた。

### 稲村神社恋物語

私が訪ねる前まで農作業をしていた義春さんが着替えてきた。「あんまりほこりだらけのもの着れないからつて」。綾子さんは「少ししゃれてきたじゃん」と義春さんを見て一

言。「俺にもお茶は？」と義春さんが聞くと「ない」と一蹴した。思わず吹き出してしまう。

思い出したように綾子さんが秋祭りの練習の話を始めた。「それでねえ、練習も楽しくて、けっきょく遊びになっちゃうの。練習しても」。夢中になつて練習していて、夜明けの三時に親が迎えに来たこともあったのだという。こういうときは男の子も女の子も一緒になつて練習していたのだそうだ。「お寺の本堂借りて踊りの練習したりね、みんな蓄音機を持つてくの。踊りなんかはね、音楽かけないよね」。

「私もやったなあ、『湯の町エレジー』（※）なんか」と綾子さんは顔を上に向ける。「それがね、二人でやるの。このおじさんと、一緒にやつて。最終的には一緒になっちゃうた」。そう言つて照れながらほほえむ綾子さんは好きな人の話をしている同年代の女の子のようで、可愛いかった。

綾子さんにとつて遊びの思い出は、少なからず義春さんとの恋の思い出も含まれる。「子どものころも一緒に遊んでけっきょく一生一緒つてことね。だからねえ、人生短いよ。あつというま。面白いでしょ。私は今の主人と一



写真を撮らせてくださいと頼むと、お互いをちらっと見た綾子さんと義春さん

生一緒だよ。

お二人とお話してから、稲村神社にいくと、今は大木が立ち並ぶことのない境内を以前と違う目で見えるようになっていた。昔は子どもたちの声で溢れていたのかな、この場所が胸がどきどきするような恋物語が紡がれていたのかなと、まるで映画の撮影場所に来たような気持ちになった。

## つるのひとこま

都留で暮らしているから気づく季節の変化、思い出のできごと、地域の行事、家族の成長を知りたい。  
地域のかたがたのカメラが写した都留をご紹介します。

都留市民のかたがた=写真  
『フィールド・ノート』編集部=文



11年ぶり2人目の孫を抱いて  
「将来はモデル。ちょーかわいい！」

撮影@三町商店街 深澤食料品店

撮った日：2016年4月13日

写っている人：深澤雅寛さん(67)と  
お孫さん(2ヶ月)

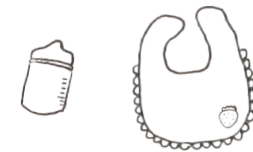


娘が撮ったお母さんと桜と都留のまち  
「お花見散歩」

撮影@お城山

撮った日：2016年4月9日

撮った人：ドクキノコイヌイさん(10)



あなたの日常の  
ひとこまを  
募集しています！

## 募集要項

- ・撮影した日、撮影スポット ・お名前(匿名希望の方はペンネームでも可)
- ・年齢(年代だけでも可) ・写真についてひとこと

## 写真はこちらまで

【メール】 field-1@tsuru.ac.jp

【住所】 〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 都留文科大学 4号館1階地域交流研究センター  
フィールド・ミュージアム部門 『フィールド・ノート』編集部

## 連載

### 研究者が語るこのまちの魅力 第3回 富士山から湧水が届くまち 3

本学ではさまざまな先生がたが市内を対象に研究活動をしています。研究者である先生がたに、都留市はどのように映るのでしょうか。これまで、市内の湧水を研究する内山美恵子先生にお話をうかがってきました。お話を締めくくる第3回では湧水の水質についてお伝えします。

#### ◆ ミネラルたっぷりの水

そもそも湧水とは地下水の一部だ。地下水は地層に含まれるさまざまな成分を溶かしながら、ゆつくりと流れている。その地下水が地表に湧き出したとき、初めて湧水とよばれる。

都留市周辺の湧水は、溶岩を含む地層を通じて湧き出している。この溶岩とは、富士山が噴火したときにマグマが噴出して固まったものだ。これにはさまざまなミネラル成分

#### ◆ 湧水を守るために

が豊富に含まれており、この成分を溶かしながら水は流れていく。そのため都留市周辺の湧水はミネラル成分を豊富に含んでいる。ただどの場所の湧水でも、同じような水質というわけではない。たとえば、地層に石灰岩を含む地域の湧水は、炭酸カルシウムを多く含むなど、水質はがらりと変わる。ミネラル成分が多い富士山の湧水はおいしいと言われるうえに、料理では食材をやわらかくするなどの効果がある。このような恩恵にあずかれるのはこの地域ならではの。

富士山から流れてくる湧水は、都留市に届く前にもいくつかのまちで取水することができ。しかしなかでも都留市の水は、とくにミネラル成分を豊富に含んでいると言える。



内山美恵子先生(49)  
COC推進機構特任教授  
水理地質学専門。2010年から  
都留での調査を始める。

伊藤瑠依(社会学科4年) Ⅱ文

まずは私たちが自分のこととして捉え、少しでも水を知ってみようと思うことが、湧水を守る第一歩となるはずだ。

地下水は溶岩のなかを流れている時間が長ければ長いほど、ミネラル成分がたくさん溶け込む。そのため水脈の末端にある都留市では、ほかの地域に比べミネラル成分の量が多い湧水が取水できるのだ。  
しかし湧水は、長い時間をかけてできあがるものだ。いい水だからといって大量に使ってしまえば、いつか枯渇してしまうかもしれない。内山先生は次のお話のようにおっしゃる。「生まれたときから当たり前のように親しんでいた風景や環境も、積極的に守っていかないと無くなってしまうことを知ってほしい。将来に向けて豊かな自然環境を守る意識を各自がもってほしい。」

まずは私たちが自分のこととして捉え、

少しでも水を知ってみようと思うことが、

湧水を守る第一歩となるはずだ。

# FIELD・NOTE NEWS

2016年4月から6月の『フィールド・ノート』編集部での活動をお伝えします。  
『フィールド・ノート』編集部=文・写真

## 今年度からの地域交流研究センター

地域交流研究センターが本学4号館1階へ引っ越ししました。昨年度まで使っていたコミュニケーションホール地下1階にくらべ、新しいセンターは広くて機材も充実した場所となりました。

また新年度から、センターと都留文科大学前駅の待合室での展示にも力を入れています。センター内ではムササビや野ネズミなど、大学周辺で暮らしている動物について展示をしています。駅の待合室では、電車が到着するまでの短い時間でも楽しめるような展示物を考え、展示しています。

6月3日には展示替えをしました。『フィールド・ノート』88号の特集「古写真を手に、まちへ」から、都留のまちの今昔を伝える写真を紹介しています。駅をご利用のさいにはぜひお立ち寄りください。

(舟田早帆)



上: 展示用パネルの作成中 下: 駅の待合室の展示替えの様子

## あの頃の都留を歩く



西願寺前の田んぼにて。参加者のかたも、案内した場所にまつわる記憶や知識を披露してくださいました

4月30日、ミュージアム都留主催のまち歩きイベントにスタッフとして参加しました。本企画は同博物館の企画展「あの頃の都留を歩く」の関連イベントです。

当日私たちは、古写真を片手に昔の都留の風景について解説しました。参加者のかたが、変わってしまったものや、無くなったものに思いを馳せるための手助けになっていれば幸いです。

88号の特集「古写真を手に、まちへ」で学んだことを活かせる、有意義な機会となりました。  
(高橋未瑠来)

## ムササビ観察日記

2013年、ムササビライブカメラを2つの巣箱に取り付けました。本学ホームページ (<http://www.tsuru.ac.jp>) では『ムササビ観察日記』のブログを更新しており、ムササビのようすをご覧いただけます。みなさんも一緒にムササビのようすを見守っていきましょう。

本学フィールド・ミュージアム=文・写真

### 3月のムササビのようす

3月23日から24日にかけて、ムササビライブカメラに、驚きの出来事が写りました。今回はその出来事をお伝えします。

#### 3月23日 いつもと違う行動



夜中、ムササビが巣箱に帰宅し、しきりに巣材を掘る姿が確認できました

#### 3月24日 子どもの誕生



しばらく見ていると、中央部分に小さく動くものが。なんと子どもを産んでいたのです

#### 2分後 子どもを残して外へ



子どもを産んですぐ、母ムササビは何かを察知したように巣を出て行ってしまいます

#### 9分後 テンの侵入



母ムササビが出て行ったあと、テンが巣箱に侵入し、子どもを食べてしまいました

年に2回訪れる繁殖の時期になると、私たちはムササビの出産を心待ちにしてきました。念願の出産が叶った直後、テンに食べられてしまったこの出来事から、野生で生きる厳しさを教えられたように思います。今後はムササビがより安全に住むことのできる巣箱を考え、制作していく予定です。

### テンってどんな生きもの？

テンはイタチ科の動物で、おもに樹上で活動します。肉食のテンはネコなどと共にムササビの天敵です。本学のライブカメラには以前からテンが写っていることがありました。



次回予告  
特集 \ 近づこう！身近な自然 /  
うら山博物館 (仮)  
2016 年 8 月発行予定

# FIELD NOTE

no. 89 Jul.

## 発行人

北垣憲仁 (20-21)

## 統括編集者

西教生 (22-23)

## 編集長

伊藤瑠依 (4-5, 18-19, 43)

舟田早帆 (45)

## 副編集長

長尾泉 (38-42)

南條新 (8-11, 28)

## 編集

加藤萌香 (44)

金原由佳 (26-27)

黒澤瑞保 (6-7)

今村遥香 (32-33)

小俣溪和 (6-7, 12-13)

高橋未瑠来 (2-5, 14-15)

菊池香帆 (1, 29-31, 48)

窪田りさ (36-37, 46-47)

山内利奈 (24-25, 34-35)

杉浦茜 (16-17)

## 編集補助

江利そらむ

小泉篤広

佐藤琢磨

高橋光

平岡摩梨菜

## ロゴデザイン

工藤真純

[ ] は編集担当ページ

FIELDNOTE (フィールド・ノート) 89 号

発行日：2016 年 7 月 7 日

発行部数：3700 部

発行・編集：

〒402-8555

山梨県都留市田原 3-8-1

都留文科大学

地域交流研究センター

フィールド・ミュージアム部門

『フィールド・ノート』編集部

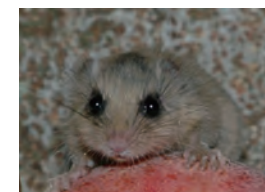
E-mail：field-1@tsuru.ac.jp

バックナンバーは都留文科大学地域交流研究センターにありますので気軽にいらしてください。

## 編集後記

### お気に入りの動物植物

うら山へ行くと、動物との遭遇を期待してしまいます。なんとうら山ではこんなにかわいらしいヤマネが見られるそうです！ ふわふわした毛並みに、つぶらな瞳。頭の上から長〜いしっぽにかけてのひとすじの模様。動物の愛らしさがつまったヤマネを見ると、思わず「がしっ」と捕まえた気持ちになってしまいます。なかなか会うことはできないので、いつもぬいぐるみで我慢することになります。(窪田りさ)



うつきょうのような形をしているなあと常々猫の尻尾を見て感じています。私は猫の尻尾が大好きです。宙に何かを描くようにゆるりゆるりと動くのを見ると、つい心と一緒に体も踊りだしそうになります。じつは尻尾には骨があるのです。だからピンと立てたり、ブンブンと振ったりでき、そうした動きから猫の気持ちを知ることだってできます。尻尾にも機能があると知ると、よりいっそう好きになってしまいますね。(高橋未瑠来)



山内家の玄関には、クレマチスというつる植物があります。我が家のクレマチスは「白雪姫」という種で、直径 15cm の真っ白で大きな花が咲きます。肥料や気温などによって花色が変化しやすく、福井県では 5 月中旬に満開になります。今年で 16 歳になる我が家の白雪姫は、近所のかたからも、ちやほやされていてうらやましいです。地元を離れてからは、母がこうして写真を撮って、我が家の春を伝えてくれます。(山内利奈)



FIELD NOTE  
no. 89

発行日 2016年7月7日 (年4回発行)  
 発行所 〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 都留文科大学  
 地域交流研究センター フィールド・ミュージアム部門『フィールド・ノート』編集部



母におくる

## 都留からの贈りもの

お元気ですか。都留は天気の良い日が続き、暑くなってきました。そこで最近私がハマっているジェラートを紹介します。

このジェラートは「炭香<sup>すすみ</sup>ファーム」というお店のもので、ちよつとほかでは食べられません。なぜなら、炭を肥料にして育てた野菜を使っているから。わざわざ炭を肥料にするのは、山をきれいにしようという想いからだそうです。伐採した木を炭にして、何かに活用できないかと考えた結果、このジェラートが作られたのです。

私はいつも、ジェラートをスプーンでたくさん練って空気を含ませ、ふわふわにして食べています。山はきれいになる、野菜もおいしくなる、できたジェラートはすごくおいしいって、いいことづくめの気がしてまた食べたくなっています。

